第三章　金沢市における創造都市形成の現状

金沢市の概要

金沢市は、北陸地方、石川県のほぼ中央に位置する都市。中核市であり、同県の県庁所在地である。江戸時代には、外様大名のなかでも最大の石高を誇る加賀藩（「加賀百万石」）の城下町として、江戸・大坂・京に次ぐ日本第 4 位の人口（約 10 万人）を擁する大都市として盛えた。第二次世界大戦で空襲を受けなかったことから市街地に歴史的風情が残り、小京都とも呼ばれる。

また、長年の都市文化に裏打ちされた数々の伝統工芸、日本三名園の一つとして知られる兼六園、加賀藩の藩祖・前田利家の金沢入城に因んだ金沢百万石まつり、さらに庶民文化（郷土料理の治部煮等）などにより、観光都市として知られる。

金沢市の人口は、約 45 万人。商圏規模は半径 50km 圏で約 120 万人とされている。

「金沢」という都市名は、昔、芋掘り藤五郎が山芋を洗っていたら、砂金が出たため、「金洗いの沢」と呼ばれたという伝説による。

前田利家が尾山城（金沢城）を居城とし、加賀、能登、越中を合わせた百万石・加賀藩の原型が形成された。5 代目藩主前田綱紀は名君として名高く、学者の招聘につとめ学問を振興するとともに、全国から職人を集め、蒔絵、金具、象嵌、陶器など工芸の振興にも力を入れるなど文治主義を徹底させた。その後金沢は 150 余年に渡り、加賀百万石の城下町として繁栄することとなる。美術工芸など現在に受け継がれる都市文化が花開いた。

明治 22 年 4 月 1 日、市制施行で金沢市となり、石川県の県庁所在地として、政治、経済、文化の中心として発展を続け、平成 8 年 4 月 1 日、中核都市となった。

金沢市の創造都市の取り組み

金沢市は、兼六園などの美しい歴史的景観を有し、北陸の小京都、あるいは歴史的観光都市と呼ばれている。また、京都に次いで伝統的工芸品産業が多く継承されている都市であり、「加賀友禅」「九谷焼き」をはじめ 26 業種の伝統産業があり、多くの市民がこれらの産業に従事している。

最近では、古くなった紡績工場の煉瓦造りの倉庫を 24 時間、365 日市民が自由に芸術活動に利用できる「金沢市民芸術村」に再生したり、旧石川県庁跡地を「金沢 21 世紀美術館」として小学生から現代美術に親しんでもらう取り組みを行ったりするとともに、金沢の伝統産業や文化の継承にも全市を挙げて取り組んでおり、「日本の創造都市」の代表的な事例としての評価が高まってきている。

繊維産業などが内発的におこっている町

金沢市は、歴史的には伝統工芸品産業を継承しながら、繊維工業と繊維機械工業とが地域内で発展を遂げ、近年には、工作機械や食品関連機械、アパレル産業、出版、印刷工業、コンピュータ関連産業などが展開する多彩な産業構造を有している。金沢の経済の特徴は、大型企業

誘致に見られる外来型の大規模工業開発を抑制し、前述の産業が内発的に発展を遂げてきたことである。

このような産業構造が、地域内で生み出された所得の域外への流出を防ぎ、中堅企業の絶えざるイノベーションや文化的投資を可能にしたといわれている。

歴史的まちなみの保存　～伝統・文化を重んじる風土～

金沢市のまちづくりは、「保存と開発の調和」を目指している。

金沢市は、前田家が支配していた江戸時代の藩政期においても、学術・文化を尊重してきた。

また、江戸時代から現在に至るまで、約 420 年以上もの間、戦禍にあわず古い歴史的街並みが残ったまちである。市民は、この歴史的景観と独自の伝統・文化を今でも大事にしている。

金沢市では、一時期、バブル経済期に武家屋敷や史跡が取り壊され、高層マンションやオフィスビルが建設される風潮が強まったが、近年は金沢の都市景観を保存し、洗練していこうという姿勢が強まった。

市では、歴史的街並みの保存に努めようと、「都市景観条例」の制定、旧市街地の伝統空間とそれを取り巻く町家群を保存する「こまちなみ条例」（10 地区指定）、街中を流れる辰巳用水や鞍月用水を再整備する「用水保存美化条例」、兼六園から周辺の山々に連なる大地の樹木を保存する「斜面緑地保存条例」などを整備した。

伝統文化の継承　～後継者の育成～

金沢市では、未来の担い手である子供たちに伝統文化を引き継ごうと、加賀宝生、素囃子、工芸（金箔）、瓦葺き、加賀野菜、和菓子などの分野で、「子ども塾」や「職人大学校」、「農業大学校」を設け、各方面の伝統文化の継承に力を入れている。

最近では、伝統文化の保存に加え、日本初のプロの室内楽団であるアンサンブル金沢を設立（1988 年）、金沢市民芸術村（1996 年開設）、金沢 21 世紀美術館（2004 年開館）するなど、新しい文化の創造にも力を入れている。

金沢市民芸術村

金沢市は、旧大和紡績の工場跡地を買い取り、その倉庫４つを金沢市民芸術村（1996 年 9 月開設）として、「24 時間、365 日」利用できる芸術活動の拠点とした。倉庫はそれぞれドラマ工房、ミュージック工房、エコライフ工房、アート工房として、練習や公演も可能な文化施設として整備された。

運営は、一般から選ばれた８名のディレクターたちで、施設利用の活性化や独自事業の企画立案、利用者調整などを自主的に行う市民参加型文化施設となった。

開設以来、多くの市民や民間団体に利用されており、2004 年度は、16,668 団体、184,995 人が利用した。

また、敷地内に金沢職人大学校を併設しており、建築の歴史、文化財の保存、修復に関する知識や技術などを教えている。

金沢 21 世紀美術館について　～来館者は 2006 年度　113 万人、累計で 390 万人～

ここからは、金沢 21 世紀美術館の取り組みを詳しく見ていく。

同美術館は、国立金沢大学付属小・中学校の跡地に、2004 年 10 月にオープンした。

イニシャルコストは約 200 億円（建築費　113 億円、用地取得費　77 億円、美術品等購入費等）。美術館は、直径 113m、周囲 350m の円形ガラス張りである。

年間運営費は約 7 億 5 千万円（事業費　2 億 5 千万円、管理費　5 億円）。その他、美術品購入費が約 1 億円である。

来館者は、2006 年度が 113 万人、累計で 390 万人（2007 年 8 月）。

美術館が設置された背景　～まちなかににぎわいを取り戻す～

美術館が設置される以前、まちの中心部から金沢大学や石川県庁が移転し、地元商店街が疲弊していた。まちに活気を取り戻すため、跡地利用は、「まちなかのにぎわいにつながる建物（交流館的性格）」を軸に検討を行い、山出市長の提案により、近現代を中心とした美術館を設置することになった。現代アートをテーマにしたのは、近くに伝統的名品を集めた県立美術館があったことも一因となっている。

美術館のコンセプト　～まちに開かれた公園のような美術館、子どもを重視～

特徴としては、無料の交流ゾーンと有料の現代アートゾーンを設けたことである。

無料ゾーンの設置により、子どもからお年寄りまで気軽に来ていただく「交流館的機能」の役割を担い、それに加えクオリティの高い展示を行うことで美術館としての質を保っている。

また、各美術館持ち回りで開催する巡回展は行わないため、すべて当館の学芸員が展示企画を行っている。

運営面での最大のコンセプトは、「まちに開かれた公園のような美術館」を目指していることである。

「誰でも気楽に」をモットーに、子どもからお年寄りまであらゆる世代の人を対象としているが、とりわけ子どもに力点をおいている。

子どもの集客を促進するための工夫　～ミュージアムクルーズ、「もう１回券」の発行～

開館初年度に市内小中学生４万人を送迎付で招待する「ミュージアムクルーズ」を実施した。

これは単純に入館者を増やしたいという思いと、子どもの時に本物の美術作品に触れることで感性を養っていくことの重要性の大きく２つの点から発案したものである。

また、子どもが楽しいと思うと親に話し、親とおじいちゃん、おばあちゃんを連れて来館する可能性が高い。「ミュージアムクルーズ」で配った子ども専用パンフレットの中に「もう１回券」（無料券）を入れたところ、７,０００枚が返ってきた。４万人のうち、７,０００人の子どもたちが再来場したことになる。これに両親等が一緒に来ていれば相当な入場者となる。

２年目からは、小学４年生だけを対象にした。

また、小中学生については、極力無料にしている。常設展は無料。企画展であっても遠足、修学旅行、社会科見学などの行事で来館する場合は、県外の小中学生でも無料である。

市民参加について　～小中学生が育てた朝顔を２，０００本植えるプロジェクトを実施～

ボランティアには、美術館の業務の一部を手伝ってもらっている。割合としては、それほど多くの業務を任せていない。むしろ、よその美術館より限定していると思われる。

市民ギャラリーＡとＢを貸館スペースにして、市民に活用してもらっている。抽選で日程を調整しないといけない状況であるが、スペースが大きいせいか、地元新聞社等の主催の展示会で使われることが多く、個人作家の展示会はその合間で行っている状況である。

美術館の周囲に、市内の小中学生が育てた朝顔の苗を 2,000 本植えるプロジェクトを行った。

地元商店街との連携　～アート　de　まちあるき～

地元商店街との連携事業として「アート　de　まちあるき」を行っている。

これは、美術館サポートショップとして美術館来場者が入場券の半券を協力店に持っていくと、店舗ごとにサービスが受けられる。

また、店舗側には、コースター型の美術館優待券（割引券）が置いてあり、これをお店からもらって美術館に来館するという双方向の効果を狙った仕組みになっている。

事業は 2007 年２月からスタートし、約半年間で 1,000 枚のコースターが返ってきている。

人材育成　～将来の金沢の基盤となる子どもを育成～

山出市長の発案により、将来の金沢の基盤となる子どもを育てる、子どもたちに金沢の伝統・工芸・文化を引き継ぐような人材育成のための取り組みを行っている。

能楽美術館では、「子ども能楽教室」、食文化の継承として「子ども料理職人塾」、寺社仏閣をはじめ、古い民家などを修理・存続できる人材を育成する「職人大学校」などを実施している。

２１世紀美術館もその一環として、新たな芸術に触れることで時代の変化に応じた新たな伝統文化を築いていく創造性を養うことを目的とする施設の一つに位置づけられている。

これらの人材育成を通して、金沢の個性を磨いていく子ども達を育てていく狙いである。

アーティスト･クリエーターの集積　～将来的にアーティストが移り住んでくれれば理想的～

このまちにアーティスト・クリエーターが根付くのは難しいと考えている。

この美術館は、他地域からアーティストやクリエーターが集まることを狙ったものではない。

地元のアーティストが美術館と関わりを持って活動をしており、いい刺激になっている。

これまで金沢では、現代アート、若いデザイナーの人たちが発表する機会がなかった。将来的には、アーティストたちが、移り住んでくれれば理想である。

効果について　～地元商店街に経済効果、新しい分野で魅力ができた～

美術館が出来て、土日の賑わいが増した。県庁があった頃は、平日は人通りが多くにぎわっていたが、現在は土日も含め賑わっている。地元商店街にも経済効果が出ている。

美術館への来館者数は、当初計画では年間 30 万人を見込んでいたが、４倍強の年平均 130 万人が来館している。来館者の内訳は市内４割、県外が６割である。

他の観光施設に行っているお客さんを取り込んでいるのかどうか、また、美術館がなかったらもっと観光客が落ち込んでいたのかは、不明である。

その他に、金沢は古いまちというイメージがあったが、美術館が出来、これまでと違った分野でまちの魅力が増えたと評価している。因みに、金沢市のまちづくりのコンセプトも“伝統と創造”である。

また、金沢市では「ファッション産業都市宣言」を行い、ファッションに関わる産業の振興に力を入れている。美術館では、展示会などのタイアップを行っている。

金沢市立美術工芸大学の設置

金沢市は、人口 45 万人の都市でありながら、市立美術工芸大学を設置し、著名な工芸作家を教授に招き、後継者育成に努めていることは特筆すべきことである。

1946 年、金沢美術工芸専門学校を母体とし、短期大学としてスタートした。後に 4 年制大学となり、産業美術学科と美術学科の二学科制となった。現在は、美術科、デザイン科、工芸科の 3 学科、大学院、造形芸術総合研究所を設けている。

卒業生は、作家、デザイナー、教員、芸術理論の専門家として活躍しており、その成果を地域に還元している。

まとめ

これまで見てきたように、金沢市は、歴史的街並みを保存し、伝統・文化・伝統工芸産業などを昔から大事にしてきた。また、その産業構造による内発型発展により、域内でのイノベーションに対する投資が進んだ。

現在、金沢市独自の伝統・文化・伝統工芸産業を後世に継承するための取り組み、新しい文化による次世代人材の創造にも力を入れていることが分かった。早くから美術工芸大学を全国に先駆けて市が設置するなど、金沢市には、昔からまちぐるみで人材を育てる風土がある。

また、市立美術工芸大学の卒業生や郷土出身者の作品については、美術館で積極的に展示しており、市民みんなで、郷土の文化を育て、応援していく。このような取り組みによって、金沢の伝統文化の末永い継承がなされるとともに、新しい感覚の市民による創造都市づくりが進むと思われる。

＜参考文献＞

・　創造都市への挑戦（岩波書店　佐々木雅幸著）
・　創造都市への展望（学芸出版社　佐々木雅幸、ＮＩＲＡ）
・　超・美術館革命（角川書店　蓑豊著）
・　フリー百科事典「ウィキペディア（金沢市）」